

越後の植物観察記(その3)

木村 彰

文中[]内は1:50,000図金井式メッシュと環境庁メッシュであるが、前者は測地系をJGD2000に改定後のものを当てているが、後者は旧Tokyo測地系のままであるので、一部該当する地形図に差異があることをお断りしておく。

I 帰化種

○ヒメカワヂシャ (ヒメカワヂサ) (ゴマノハグサ科) *Veronica anagallis-aquatica* L. f. *anagalliformis* Beck.

小千谷市高梨町40m [長岡384373-21, 5638-06-06] (写真1:2005年6月12日撮影)

信濃川河川敷に群生していた。ウシハコベ、スカシタゴボウ、スズメノテッポウ等と混生しており、周辺にはムシクサ、ミコシガヤ、ヘラバヒメジョオン等が見られた。花序や花柄に腺毛があり、上記品種に該当するものと思われる。『河川水辺の国勢調査年鑑』の1994-99年の調査及び西山・荒井(1980~94)には記録がないものの、侵入後数年を経ていると推定された。藤塚治義氏によると2000年には母種オオカワヂシャを確認しており、現在は信濃川・魚野川の河川敷に広く見られるとのことである。国土交通省北陸地方整備局信濃川河川事務所の『五辺の水辺の生物』にもオオカワヂシャの記録がある。外来生物法の特定外来生物指定種。

○ベニバナセンブリ (リンドウ科) *Centaurium erythraea* Raf.

三島郡寺泊町敦ケ曾根 (現・長岡市寺泊敦ケ曾根) 13m [三条384374-23, 5638-36-35] (写真2:2005年7月18日撮影)

国道の中央分離帯に群生していた。本年報2003に掲載したハナハマセンブリ *C. tenuiflorum* (Hoffmanns. et Link) Fritsch との区別は微妙であるが、花冠裂片の長さ、がく片の長さ、萎んだ花の様子、葉の基部のつき方等が識別点として挙げられている。標本は新潟県立植物園が所蔵。森田弘彦氏は上越市でも採集されたという。

○オッタチカタバミ (カタバミ科) *Oxalis dillenii* Jacq.

新潟市濁川4m [新潟391376-33, 5639-71-22]

新潟市小須戸3m [新潟391375-23, 5639-50-16] (写真3:2005年5月22日撮影)

『新潟県植物目録 [チェックリスト] (予報)』に記載されていないが、市街地には稀ではない。カタバミの生態型とされるタチカタバミと酷似するが、托葉が小さい、葉縁の毛が寝ている、果期の花柄が下方に反り返る等が区別点とされる。

○シンテッポウユリ<タカサゴユリタイプ> (ユリ科) *Lilium × formolongo* Hort.

柏崎市米山町14m [柿崎382372-34, 5538-73-74]

三島郡和島村 (現・長岡市) 島崎18m [三条384374-12, 5638-26-91] (写真4:2005年8月21日撮影)

三島郡出雲崎町小木53m [出雲崎383374-41, 5638-25-16] (写真5:2005年8月21日撮影)

帰化種としては古くから知られ、佐渡では昭和30年以前から逸出していた (伊藤, 1995) とされ、本土側でも時折栽培か逸出かよく分からないものを見かけることはあった。しかし、近年増加傾向にあるのか、国道116号線・出雲崎バイパスでは点々と、所によっては固まって見られる他、国道8号線米山交差点にも群生し、国道17号線・小千谷バイパスにも見られるようである。上記、出雲崎の地点では頭花の小さいいわゆる直立型のカワラヨモギと混生しており、吹付種子由来かもしれない。なお、この植物をシンテッポウユリと呼ぶべきかタカサゴユリと呼ぶべきかについては見解の統一がなく、文献により対応が分かれている。

II 在来種

○アブノメ *Dopatrium junceum* (Roxb.) Buch.-Ham. ex Benth. (ゴマノハグサ科, 県: 絶滅危惧II)

新潟市新和0m [新潟391376-12, 5639-60-73] (写真6:2005年8月17日撮影)

ミズワラビの生育地点として本年報2003年に掲載し、経年観察している地点であるが、昨年アブノメが40株以上出現した。種子供給源の気になるところである。なお、昨年掲載した新潟市木場の生育地には2005年も同様に群生が見られた。

○ヒメビシ *Trapa incisa* Siebold et Zucc. (ヒシ科, 県: 絶滅危惧Ⅱ)

新発田市下山田18m [新発田392376-34, 5639-73-70] (写真7:2004年8月14日撮影)

『レッドデータブックにいがた』(2001)には「県内の生育地は福島潟を最後に他では確認していない。最近福島潟でも確認されず、絶滅した可能性がある」とある一方、近年も上越市(旧柿崎町)から記録がある(柿崎町町史編さん委員, 2004; 筆者も記載の一箇所で果実を確認した)等情報不足の感があるが、ここでは地形図にも載っていない小さな池を覆い尽くしていた。イヌタヌキモを伴っている。2005年にも前年より生育状況は不良であったが生育を確認している。

○ミズニラ *Isoetes japonica* A. Braun (ミズニラ科, 県: 絶滅危惧Ⅰ)

岩船都神林村北新保8m [村上392382-41, 5739-23-05] (写真8:2005年11月6日撮影)

ここでは2001年11月11日に群生を見て以来、2002年、2004年は晩秋まで水が引かず、2003年は工事のため立ち入り禁止で確認できなかったが、昨年4年ぶりに3個体だけであるが生育を確認した。その後、さらに水が引くともっと発生したのかもしれない。文載では、当地で「石沢の1984年の標本があるが、1986年の調査では確認できなかった」(笹川, 1987)とあり、その後の空白期間及び冠水下での生育状況が気になるところである。

Ⅲ 雑 録

○ヘラオオバコ *Plantago lanceolata* L. の奇形 (写真9:2005年6月5日撮影)

小千谷市高梨町の信濃川土手でヘラオオバコの奇形を見かけた。ひとつは花序が上部で野球のグローブ状に分岐するもので、本年報2003年に掲載した花序が下部で分岐するものと対をなしている。1株であるがその全ての花序が同様であった。また、花茎に葉身をつけたものが別々の個体で2花茎見られ、雌蕊だけで雄蕊のない雌性株も多数見られた。

○5月に咲くススキ *Miscanthus sinensis* Andersson の追記

昨年掲載した5月に咲くススキであるが、2005年は新潟市上所や浦川原では5月14日には既に出穂していた。予想以上に開花が早いようである。また、この5月咲きは新潟市～三条市～長岡市の平野部では広く見られることも分かった。帰化植物メーリング・リストでは愛知県でも6月にススキの開花が報告されている。

○苞が二枚あるミズバショウ *Lysichiton camtschatcense* (L.) Schott (写真10:2005年4月10日撮影)

五泉市郷屋のミズバショウ公園にミズバショウの花期には初めて訪れてみたところ、苞が2枚あるミズバショウが散見された。サトイモ科植物の二重苞自体はしばしば見られる事象であり、ミズバショウの苞が二枚のものにはオチクラミズバショウ *f. ochikurense* Okuhara の品種名がある。当地のものが固定した性質かどうかは不明であるが、事象の発現数は多いようである。他にも葉が苞化したのか、花序のない仏炎苞だけを付けた株や花被片が苞化したのか花序からもやしのようなものを伸ばした株も見られた。それぞれ原因は不明であるが、ミズバショウは外部からのストレスが可視的に表現されやすいのであろうか。

○ヒメオヒルムシロ *Potamogeton × yamagataensis* Kadono et Wiegand の開花 (写真11:2005年7月24日撮影)

本報告2003に五泉市萩曾根の開花個体を掲載していただいたが、同所ではその後2005年まで連続して毎年開花が見られている。本雑種の開花については角野(1994)には「花は稀にしか咲かない」とあるだけで詳細の記述がないため、ひとつの観察記録として報告する。但し、薄葉(2002)にも「結実せず」とあるので、他所でも開花までは見られるようである。当地でも結実を確認していない。

[文 献]

米倉浩司・梶田忠(2003) BG Plants 和名-学名インデックス (YList),

<http://ginkgo.bg.s.u-tokyo.ac.jp/bgplans/download.php>

帰化植物メーリング・リスト(2002～) 連絡先 naturplant-admin@ml.affrc.go.jp

清水矩宏・森田弘彦・廣田伸七編著(2001) 日本帰化植物写真図鑑-Plant invader 600種-, 全国農村教育協会

リバーフロント整備センター編(1997) 平成6年度河川水辺の国勢調査年鑑 植物調査編, 山海堂

リバーフロント整備センター編(2001) 平成11年度河川水辺の国勢調査年鑑 植物調査編, 山海堂

西山邦夫・荒井ミキ(1980～94) 信濃川の河辺植物(第1～14報)、長岡市立科学博物館研究報告 No.15～29

国土交通省北陸地方整備局信濃川事務所(ホームページ), 五辺の水辺の生物 植物確認種リスト

http://210.131.8.12/%7Eshinano/tazuneru/gohen/list_shk.html

千葉県史料研究財団編(2003) 千葉県の自然史誌 別編4 千葉県植物誌, 千葉県

神奈川県植物誌調査会編(2001) 神奈川県植物誌 2001, 神奈川県立生命の星・地球博物館

新潟県植物目録編修委員会(2005) 新潟県植物目録[チェックリスト](予報)維管束植物・コケ植物, 植物同好じねんじょ会

伊藤邦男解説(1995) 佐渡の花 春・夏・秋, 佐渡の植物刊行会

全農教・日本帰化植物友の会通信編集部(2005) タカサゴユリか, シンテッポウユリか?, 友の会通信No.5, 友の会事務局

新潟県環境生活部環境企画課(2001) レッドデータブックにいがた-新潟県の保護上重要な野生生物-

柿崎町町史編さん委員会(2004) 柿崎町史 自然・民族編 別冊 自然編 リスト集, 柿崎町

笹川通博(1987) 北新保大池小池の植物, 新潟県植物分布図集第8集, 植物同好じねんじょ会

奥原弘人(1992) 信州の珍しい植物 出会いを求めて50年, 信濃毎日新聞社

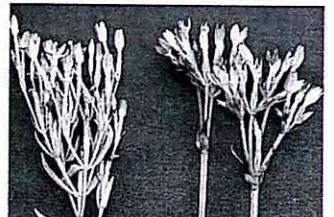
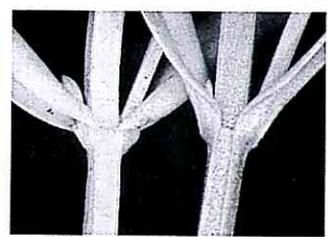
石沢進・朱雁(2004) 新潟県植物分布資料(3), 新津植物資料室年報 2003, 積雪地域植物研究所(新津植物資料室)

角野康郎(1994) 日本水草図鑑, 文一総合出版

薄葉満(2002) ふくしまの水生植物, 歴史春秋社



[写真1] ヒメカワヂサ (右は花序の一部、腺毛がある)



[写真2] ベニバナセンブリ (右はハナハマセンブリ<左>との比較)



[写真3] オッチチカタバミ (右は葉縁)

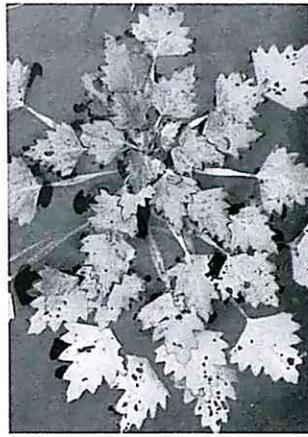


[写真4] シンテッポウユリ

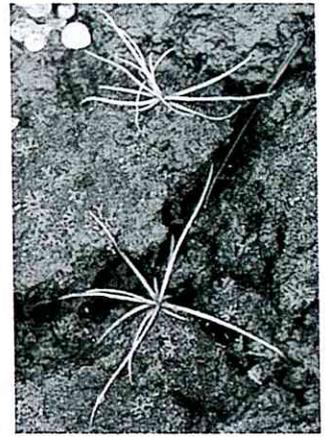
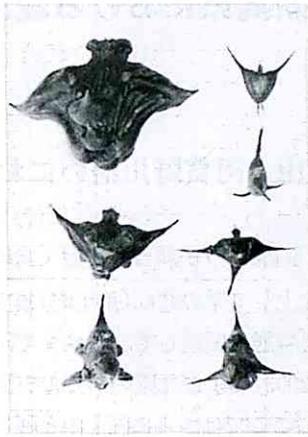
[写真5] シンテッポウユリ



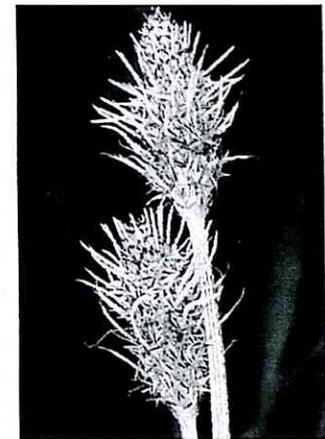
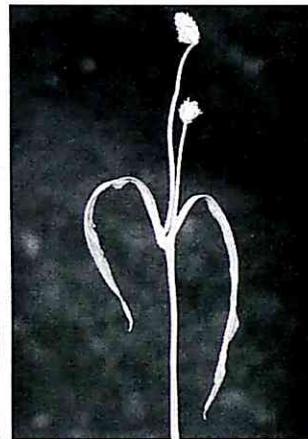
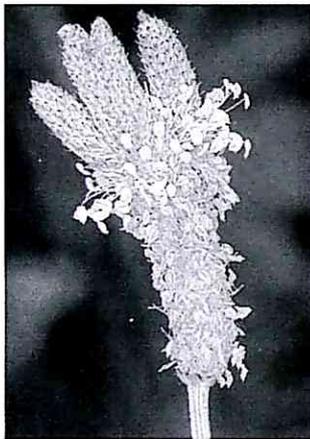
【写真 6】 アブノメ



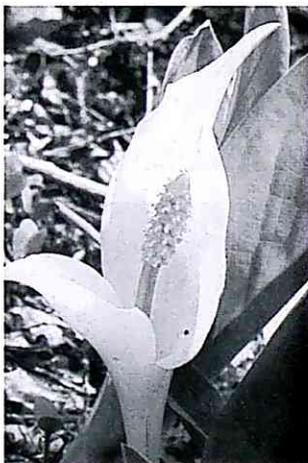
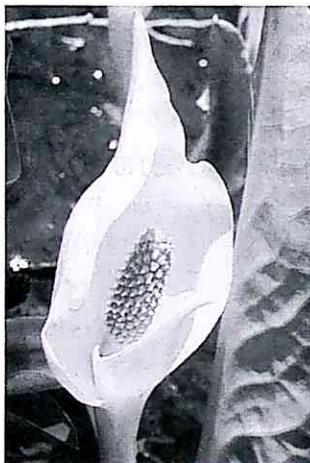
【写真 7】 ヒメビシ(右はオニビシ、ヒメビシ、ヒシ、コオニビシの比較)



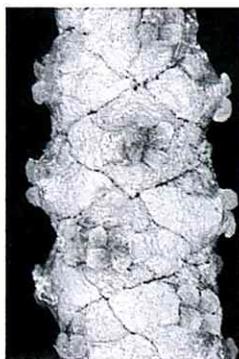
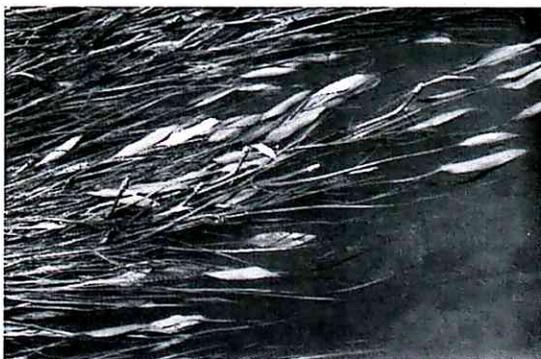
【写真 8】 ミズニラ



【写真 9】 小千谷市高梨町のヘラオオバコ (左から奇形3枚と雌性株)



【写真10】 五泉市郷屋のミズバショウ (左から二重苞2個体、苞だけで花序のないもの、花被片の弁花)



【写真11】 ヒメオヒルムシロの開花状況 (右は花序の一部)